

- 本県のウメは全国で第2位の産地だが、高齢化に加え、価格の低迷、それに伴う放任園が増加し、産地として危機的状況に陥っていた。
- このため普及指導室では、①生産・産地対策 ②流通・販売対策 ③加工・商品開発を3本柱とし、H27年に「ウメ産地再生プロジェクト」を立ち上げた。
- 令和2年度にはウメの販売額が近年では最高となり、国事業を活用した改植等により、産地再生に向けて大きく動き出している。

## 具体的な成果

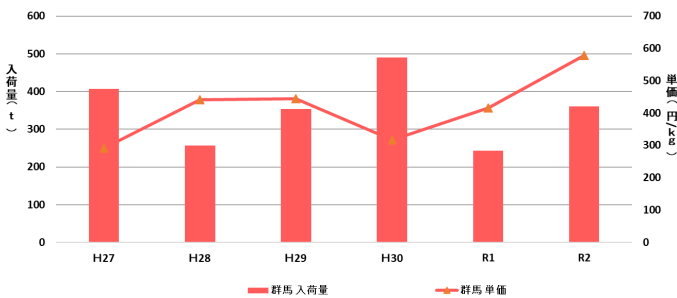
## 普及指導員の活動

## 1 現品種課題解決のための課題整理と出荷システムの再構築

- 陥没症対策・収穫適期把握等の実証ほの設置及び速やかな農家への情報提供により、産地全体の販売額が向上(H27→R2)

東京都中央卸売市場における販売金額  
117百万円 → 209百万円

東京都中央卸売市場における群馬県産梅の入荷量と単価の推移



## 平成27年度

- 農業革新支援専門員が中心となり、農業事務所、農業技術センター、JA等によるプロジェクトチームを設置
- 陥没症及び、収穫適期把握のための実証ほの設置、試験開始
- 実需者とのマッチング開始

## 平成28年度

- 標高差にあわせた出荷システムの再構築(早朝もぎの実証)
- 核色、硬核調査による適期収穫判断
- 現地授粉樹のS遺伝子の解明
- 実需者による新育成系統の加工適性評価開始

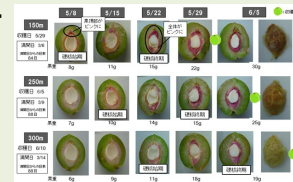


写真2 核色、硬核調査

## 2 県新育成品種導入による生産安定化

- 県育成新品種「群馬U6号」の導入で、主力品種安定生産に寄与

導入本数 (R2まで)

2, 811本



写真1 「群馬U6号」

- 品種化に向けて実需者(カリカリ漬加工業者)と連携し、加工委託した上での意見も取入れ、育種年限を短縮

## 3 産地再生にむけて農家始動

- 将来を見据え、国の事業を活用による改植を実施し、生産性・作業性向上

国事業による改植実施 (H25～R2)

面積 15.7ha 園地数 65園

## 普及指導員だからできたこと

- ・ 実需者、地元大学、市町村、県各課、農業技術センター、生産組織等と連携、総合力を発揮
- ・ 問題も解決方法も現地の中にあると考え、現地での問題解決を目指し、機動的に活動することができた。

## 「ぐんまのウメ」産地再生支援

活動期間：平成27～（継続中）

### 1. 取組の背景

本県のウメは、和歌山県に次ぐ全国第2位の産地であるが、樹の老齢化や、近年の天候不順等により生産が安定せず生産量が減少している。特に、本県の主要品種である「白加賀」は、高温障害である「陥没症」が発生しやすく、市場価格低迷の一要因となっており、対策が求められている。そこで、関係機関が一体となって「ウメ産地再生プロジェクト」を平成27年4月17日に立ち上げ①生産・産地対策、②加工・商品開発支援、③流通・販売対策支援を3本柱として、総合的に産地振興に取り組み、次世代につなげるウメ産地への再生を目指している。

### 2. 活動内容（詳細）

- (1)陥没症対策実証ほの設置や、農業技術センターと連携して陥没症が起こる時期、原因等について検証した。
- (2)収穫適期把握のための実証ほを標高別に設置、硬核状況について調査した。
- (3)ウメ新品種「群馬U6号」の導入による結実安定を図った。
- (4)実需者とのマッチングにより、群馬のウメを使用した商品開発を支援した。

### 3. 具体的な成果（詳細）

#### (1)陥没症対策

農業技術センターの試験成績や普及実証ほ等の結果に基づき、適熟（核色3を過ぎた、胚固化完了10日後以降）収穫、30℃以上の高温が予想される日は果実の温度が低い午前収穫が効果があることが確認され、これらを踏まえて全地区で対策の徹底を呼びかけ陥没症対策を図った。その結果、陥没症発生がなく品質が確保されたため、有利な価格で販売することができた。

#### (2)収穫適期把握による出荷体系の構築

農業技術センター、西部農業事務所と連携して標高別、品種別に硬核調査を行った。その結果、硬核は標高や品種、年度によって大きく変動し、従来の収穫適期では用途別収穫としては誤差があることがわかった。

そこで、この調査結果を目揃い会などで速やかに情報提供し、品種別、用途別に収穫期間をずらすことで労力分散が可能になり、家族を中心とする労力で適期に収穫・出荷することができた。

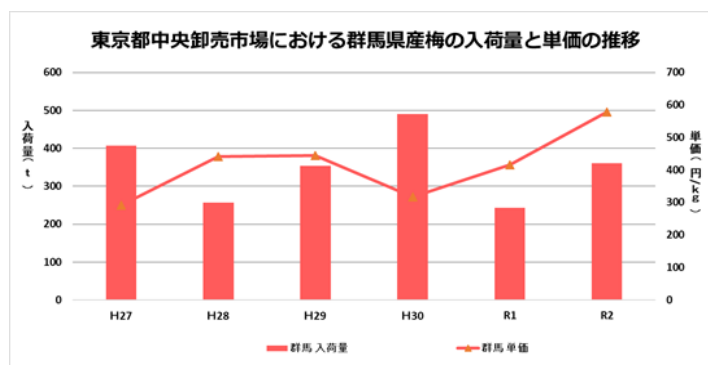


図1 東京中央卸売市場における群馬県産梅の入荷量と単価の推移

また、JA と情報共有して計画出荷ができたため、市場から高い評価を受けた。

### (3)ウメ新品種「群馬U6号」の導入による結実安定

ここ数年「白加賀」の不作が続いている中で、新品種「群馬U6号」は主力品種の「白加賀」と開花期が同時期で交雑和合性があるため、受粉樹として適している。また、自家結実性を持つため豊産性でもある。

そこで、3カ年で計画的な苗の生産配布を計画しており、3年目の本年度は795本の苗木を産地に配布することができた。

また、H30年度から農業技術センターと西部農業事務所と協力して、結実不良の園地2カ所で「群馬U6号」の導入による結実安定の現地試験に取り組んで導入効果を調査している。なお、R2年11月19日付けで、登録品種の名称「群馬U6号」（登録番号28221）で種苗法による品種登録がされた。



写真1 ウメ新品種「群馬U6号」の苗木品質調査・配布準備

### (4)実需者とのマッチングと商品開発

県内梅加工業者（5社）と関係機関で検討会を実施した。近年の夏場の猛暑等の影響もあり、ウメの需要も伸びており加工業者からも引き合いが強く安定生産と供給が求められている。県オリジナル品種「群馬U6号」への期待もあり県内関係者が協力して群馬県のウメのブランド化を進めるため、商標登録について候補名称を3候補にしぼり登録に向けて進めて有利販売に繋げていきたい。

また、新品種「群馬U6号」の加工適性を確認するため、県内企業にカリカリ梅の加工試験を依頼し概ね良好な評価で適正な収穫期等が把握できた。

また、大手メーカーから群馬のウメ「白加賀」を使用した商品や飲料も開発販売された。

## 4. 農家等からの評価・コメント（共計生ウメ委員会役員 H氏）

東日本大震災の影響で、大手の加工業者のウメの買い控えから価格が暴落し、高齢化もあいまってウメの耕作放棄園が増え、産地は存亡の危機に陥った。

しかし、プロジェクトの取組により指導機関より陥没症対策や標高、用途に応じた収穫適期の指導を受け、ウメの品質の向上が図られ、「群馬の白加賀」は品質が高いと評価され、取引先市場からは産地の維持継続を熱望されており、加工向けを含めて、現在は販売するウメが足りない状況である。

そのため、補助事業等を活用した老木の改植の動きも活発となり、ウメ部会全体で生産の機運が高まっている。今後もプロジェクトを通して産地支援をお願いしたい。

## 5. 普及指導員のコメント（西部農業事務所・補佐・千木良昭宏）

このプロジェクトは、技術指導や補助事業を担当する地元の農業事務所、研究・開発としての農業技術センター、生産振興・流通対策を行う蚕糸園芸課と各機関が役割分担し協力して進めており、年を追う毎に実績があがってきていると感じている。群馬U6号の導入による結実安定と販売果実の品質向上が、価格に反映されてきていることから農家の意識改革が進み、さらに良い選果を自ら行うなどの改善が見られるようになり、産地でも再生に向けたさまざまな取り組みが始まってきている。

今後は担い手の確保育成が一層求められてくるため、労力確保の問題解決に向けて取り組み、産地の維持発展のために支援を行っていく予定である。

## 6. 現状・今後の展開等

(1) 生育予測式（硬核開始期、硬核終了期、落果期）を利用したデータを活用するなどして適期収穫による陥没症の発生防止対策を徹底し、品質向上による有利販売に結びつける。

(2) 今後、生産量確保のため、ウメ新品種「群馬U6号」等の導入を推進して受粉樹割合を増やすように働きかけ、産地としての生産安定を図るとともに、国の事業を活用し生産性の低い老齢樹の改植を推進する。

(3) 収穫適期の指標となる核色カラーチャートを活用して、用途別加工適期を把握し、適期収穫の推進及び利用方法の拡大を図る。

(4) これまで得られた各種の試験結果を踏まえた計画生産、計画販売による有利販売、補助事業なども活用した担い手への農地集積、新規就農者の掘り起こし等を体系的に推進し、本県ウメ産地の維持・発展を目指す。